

---

# 隠居する最強猛者と攫われた少女

ハヤブサ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

隠居する最強猛者と攫われた少女

### 【Nコード】

N3837BA

### 【作者名】

ハヤブサ

### 【あらすじ】

タイトルそのままです。

隠居している最強猛者がある時、盗賊を征伐した時に出会った少女とありあえず、家に連れて帰ったが、扱いに困ってそのまま一緒に暮らす話です。

基本、登場人物は最強猛者と少女と猛者のお友達だけです。増えるか増えないかは感想or作者の気分次第。

猛者さんは歴史上最強、かつ、マイナーな人物を取り上げてみまし

た。  
誰か当たってみて下さい。

## 出会い（前書き）

そう、あれは……千年以上前のことだ。  
だが、僕は昨日のように思い出せるよ。  
さあ、語ろうか。

と、忘れる所だった。

この話でもしかしたら君の抱く孟起の気持ちが変わってしまうかも  
知れない。

その覚悟があるなら聞いてくれ。

孟起のことを知らないのなら、参考までにこの話を聞いてくれ。

じゃあ、今度こそ話そうか。

そうだな      あれは孟起が十五の時だったか。

## 出会い

夜中、俺は気配を感じて立ち上がった。

傍らにいた愛馬に乗って、走り出す。

暫く走り出すと、五人の馬に乗った男を遠くに発見した。

赤い装束……ファンテリ賊か。大きな籠を持っている。

俺は背中にあつた弓矢を取ると、走りながら弓を引き絞った。

「俺の矢は絶対に、外れない。」

自己暗示を掛けるように低く呟くと、矢を放った。

はたしてその通りか、五人組のうちの一人の頭に命中した。

その男がドサツと落馬すると同時に男共は状況を悟ったようだ。

馬を止めると俺の方を向いて二言三言仲間同士で言葉を交わすと、

三人が俺に向かつてきた。

俺は弓矢を背中に戻すと腰から細身の剣を抜いた。

「うおおおおおおお！」

雄叫びを上げながら向かってきた男に俺は無言で胸に剣を突き出す。

心臓を貫く手応え。

男は何か起こったか分からずに落馬した。

残りの男は怯んだようだが、二人がかりで襲いかかってきた。

俺は剣を投げると、その剣は寸分変わらず男の一人の胸を貫通した。

残った男は俺に武器がないと見ると勝利を確信したように刀を振りかぶって笑った。

良い刀のようだ。この男の物にしておくのは勿体ない。

男が刀を振り下ろす。だが、それは俺を傷つけることはない。

左手一本、人差し指と中指で白刃取りを行うと空いた右手で男の首を掴んでへし折った。

男は刀から手を離すと落馬した。

その前に俺は男の腰から鞘を取り、男の服を少し破った。

その破った布で俺は手を拭くと、男から奪った刀を同じく奪った鞘にしまった。

そして腰に差すと投擲した剣を回収して残る一人の男の場所に向かった。

「た、助けてくれ……。」

「男が命乞いとは見苦しい。」

そうばっさり言い捨てると剣を一閃した。

男の首が吹き飛ぶ。

大きな籠と馬がそこに残った。

俺は馬を一つにまとめると自分の馬に括り付けた。

俺は籠の蓋を開けると、中で少女が寝ていた。

と、パチツと彼女は目を開けた。月光で目を覚ましたらしい。

「お兄さん、誰？」

「まずはお前さんから名乗りな。」

「私は鈴。劉鈴。」

「隣か。分かった。俺は名乗るほどの名前ではないが、孟起だ。」

俺は少し微笑を見せると籠を馬に乗せた。

「少し揺れるぞ。」

「うん。」

「俺の住まいまで連れて行く。少し寄り道するが。」

「うん。」

俺は馬に鞭をやると駆け出した。

「お前が女のを連れてくるなんて珍しいな。」

「さっき拾った奴だ。またファンテリーだ。」

ふん、と鼻を鳴らすと俺の話しかけた相手は女物の服や小道具を寄越した。

「恩に着る。」

俺はそれだけ言うと、馬をまた走らせて住まいに向かった。

「孟起、さっきのは？」

走りながら鈴は顔を突き出して訊ねた。

「俺の知り合いだ。昔から考えを読むのが得意な男だ。」

「へえ……。」

やがて、住まいに着くと籠を降ろして馬を括り付けた。

そして籠を降ろすと鈴は興味津々に辺りを見渡しながら住まいの中に入った。

俺の住まいは簡易な小屋だ。入ると俺の寝室。脇に部屋が一つある。

「その部屋をくれてやる。好きに暮らせ。」

俺は脇の部屋を指さしてそう言つと、鈴は頷いてそこに入った。

さて、明日からどうしようか。

## 出会い（後書き）

ハヤブサです。

大好きな歴史上人物を出してみました。  
孟起さん格好いい！。

何だか分かりますか？  
ぐぐったら一発ですけどね！。

グダグダ書いていきますね！。

よろしくお願いします！。

## 素振り

「ほう、それでその子の行き場に困っているよ。」

俺の友人は汁を啜りながら言った。

「うむ、如何様にしようかと悩んでいる。」

俺が言うと同時に囲炉裏の鍋から汁を椀に注いだ。

友人は気を利かせて俺の住まいに深夜訪れてくれたのだ。

不承不承向かい入れたが、内心大歓迎だった。

彼が鈴を連れて行ってくれれば万々歳だからだ。

だから、こうして味噌で軽く味をつけた汁を囲炉裏でふるまっているのだが。

「お前の考えることは分かるが、連れて行けないぞ。」

友人は俺の目を見て言った。

「そうか。」

俺は落胆しながら汁を啜った。

「いっそのこと、お前が嫁に娶ってしまえばどうだ？  
ぶっ。」

俺は思いつきり汁を噴いてしまった。

「な、なんと言っことを……。俺は一生天涯孤独で生きると言った  
だろう。それをこんな少女を薦めるとは貴様……。」

「ふむ、満更でもないようだかな。」

友人は落ち着いて汁を飲み干すと、俺に空になった椀を突き出した。

俺は黙ってその椀に汁を注ぎ足すと、椀を突き返した。

「そもそも、嫁なんて性に合わない。余計な手間が増えるだけだ。」

「ふーん？本当にそうかな？」

友人はジロジロと俺の顔を見た。

俺ははあ、とため息をついた。そして無言で剣を抜いた。

「本当だが、信じなければ斬るぞ！」

「まあ、いいけど。」

友人は突き出された剣も物ともせず、腕の汁をずずと啜った。そして、隣の部屋に視線を移す。

「何か出身を現すような物はなかったのか？益州だったり涼州だったりその風土の物は持っているだろう？あつたら寄越せ。」

「それがだな、何も知らんし何も持っていないそうさ。」

俺はそう言いながら汁を口に含むと、友人は呵々と笑っていった。  
「あるではないか。彼女の衣服だよ。」  
ぶっ！

俺はまたしても汁を噴いてしまった。

「き、貴様……まさか……服を剥げと？」

「誰がそんなことを。貴様に女物の服をくれてやっただろう？」

俺はそう指摘されると、無言で首を振った。

「着替えてはおらん。」

「左様か。着替えたらこっすり渡してくれ。すぐに調べよう。」

友人はそう言うと汁を飲み干した。

「さて、お暇しようかの。ええと、おなごの名前は何といったかな？」

「劉鈴だ。」

「うむ、分かった。また来よう。」

友人はそう言うと外に出て行った。

暫くすると馬の嘶きと蹄の音が聞こえた。

蹄の音が遠ざかるのを聞きながら俺は残った汁を飲み干した。

そして、立ち上がると腕を水桶で洗い、物干し台に置くと厠に行  
った。

用を足すと寢床に足を向けたが、ふと思うことがあって劉鈴の寢  
床に向かった。

鈴はあどけない寝顔で眠っていた。

美しい顔立ちでただの農村にいる少女とは思えない。

まあ、農村にいる程度じゃファンテリーに誘拐されないだろうが。

俺はフツと一人で笑うと寢床に潜り込んだ。

朝、目を覚ますと俺は外に出て剣の素振りをした。

これは日課だ。欠かすと身体が鈍ってしまう。

「おはよう！孟起！」

明るい声がして振り返ると、鈴が玄関に出て手を振っていた。

「おう。」

俺は素っ気なくそう答えると、素振りを続けた。

「ねえねえ、孟起、何をやっているの？」

とととととと近付いて鈴は訊ねた。

「剣の素振りだ。武芸の鍛錬こそ漢のやることだ。」

俺は見向きもせず、ただ一身に剣を振っていると鈴は明るい声で言った。

「私もやる！」

「は？」

思わず手から剣がすっぱ抜けた。

地面に落ちた剣を拾って鞘に収めると、俺は鈴を見て言った。

「武芸という物は漢がやるものだ。女がやるものではない。」

「でも、やるっ！孟起がやるなら私もやるっ！」

はぁ……と俺はため息をついた。これだから餓鬼は面倒くさい。

仕方がないので俺は薪小屋から程良い重さ、長さの薪を抜くとそれを剣で削って握りやすい木刀の形にした。

「百歩譲ってもこの木刀だ。貴様に真剣はまだ早い。」

「む。」

鈴は暫くむくれていたが、それを受け取ると一心不乱にそれを振り始めた。

「ダメだ。なっていないぞ。」

俺が言つと、鈴は手を止めて小首を傾げた。

俺は彼女の手を取ると、構えを作り上げた。

「これが基本だ。で、ここから振り下ろす。」

手を添えて木刀を上下させた。

「うんっ！」

その動きを必死な顔で覚えると、全くその通りに剣を振り始めた。

その振りは教えた通りに忠実だ。

こいつは逸材かもしれない。

俺はそう思いながら剣を抜いて、鈴の横で素振りを始めた。

## 素振り（後書き）

ハヤブサです。

早速、お一方お気に入りのお方がいらっしやって大変嬉しいです。やっぱり、書く気力になりますよね。

で、頑張って一話書き上げました。

本当は明後日……いや、明日書く予定でしたが。

さて、感想をお待ちしていますね。

いやー、誰が最初に孟起さんが誰か言い当てるかなー。  
楽しみです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3837ba/>

---

隠居する最強猛者と攫われた少女

2012年1月12日01時02分発行